

新型インフルエンザとアフリカ

永原陽子 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)

新型インフルエンザの発生でアフリカ学会大会が無事に開けるかどうか、気を揉んだのは今春のことだった。それから1カ月半あまり。この文章を書いている7月初め、インターネット上でナミビアの新聞(*The Namibian* 7月1日付)を読んでいたところ、「豚インフル発生の疑い」の記事が目にとまった。改めて調べてみると、すでに6月半ばに南アフリカで発生が確認されている。この件でアフリカ大陸に関するニュースを耳にすることのないままにいたのは、日本の(そしてその情報源となっている欧米の)マス・メディアで報じられていなかったからにすぎない。

私はここ数年、第一次世界大戦期の南部アフリカの歴史について勉強しているが、史料の中で、「流行病」で命を落とした人の話にしばしば遭遇していた。1918年の「スペイン風邪」が彼の地で及ぼした社会的影響は、予想以上に大きい。疫病の記憶は、この時期に生まれた子供たちに多い“Frazer”という名にも刻印されている。

南アフリカへのインフルエンザの伝播は、大戦でヨーロッパ戦線に動員されていた大量の「原住民兵士」がケープタウンの港に帰還したことから始まった。まさに、ヨーロッパの戦争が、遠く離れた大陸南端の地に、いち早くこの疫病を広げたのである。

支配層にとって疫病の恐怖は、何よりも「人種を問わず」広がる点にあった。そこで、「公衆衛生上の理由」から、都市部で居住空間の人種別隔離が進められることになった。ケープタウンやダーバンでは、すでに世紀転換期の南ア戦争中、腺ペストの流行をきっかけに、アフリカ人専用の居住区が設けられるようになっていたが、スペイン風邪の流行はそれに次ぐ第二の隔離の波をもたらししたのである。一方、農村部では、コーサのノンテタやズルーのジョゼフィーナなどの女性預言者が、疫病におののく人々の心をつかんだ。当局から「狂人」扱いされたノンテタは、生涯、精神病院に収容される運命となる。彼女に一目会おうと病院に向かった人々が、パス法違反の廉で逮捕される事件も起こっている。

2010年のサッカーW杯に絡み、巷ではそうでなくとも、南アフリカの「衛生」や「治安」をめぐる危うい言説が流布している。新型インフルエンザ流行下のソウエトのスタジアムでこそ、こうした歴史を思い起こしてみたい。